●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 7 − 5

働くお母さん(2)

目次

要　約 …… 2

1. 働く母親たちの実態 …… 6

- 母親たちの属性 …… 6
- その就労パターン …… 9
- なぜ、いま働いているのか …… 11
- 家族の支持 …… 13

2. 働く母親の一日を追って …… 16

- 朝の忙しさ …… 16
- 母親の出勤形態 …… 17
- 夕食作りの工夫 …… 19
- 一日を終えて …… 21

3. 家族にしてあげたいこと …… 22

- 家事について …… 22
- 夫について …… 23
- 子どもについて …… 25

4. 母親としてどう生きるか …… 29

- 自分は幸せか …… 29
- 母親たちはどう生きたいか …… 31

子ども研究ノート ⑤
教　師 …… 深谷昌志 …… 34

資料1　調査票見本 …… 39

資料2　基礎集計表 …… 50

調査レポート／働くお母さん(2)

要　約

①調査の目的

働く母親が増加する一方の今日、そうした母親たちが、自分たちの就労と子育てや家事とをどう両立させようとしているか、また自分の就労の意義をどう受けとめているかを、母親の側から探ろうとした。

②母親の属性

調査が行われたのは、東京と千葉県の母親1,669名。うち何らかの形で働く母親は、59%。年齢は30代後半が5割。高卒が6割。子どもの数は2人が6割(図1～図6)。

③母親の就労形態

パートタイムが42%、フルタイム21%、自営業の手伝い(家業)12%、内職13%などが主であり(図7)、週5日(28%)か6日(45%)の勤務形態が多い(図8)。また収入は種々のレベルがある(図10)。また卒業後ずっと同じ仕事をしている者は11%にすぎない(図11)。

東京学芸大学教授　深谷和子

千葉県総合教育センター　中原美恵

④家族の協力度

母親が働く動機は極めて多様だが(図13)、それに対してほぼ賛成する夫は(「とても」「まあ」を合わせて)6割、子どもは5割である(図14)。しかしその割には、夫や子どもの家事協力度は極めて低い(図15)。働く母親を助けるのは「祖母」だが、しかし祖母がいる家庭は28%しかない(図15、図16)。

⑤働く母親の一日

朝から夜まで極めて多忙だが、その割には「夕食材料の宅配、冷凍食品、レトルト食品」などの利用率は低いし(図24)、外食も少ない(図26)。

⑥家族にしてあげたいこと

家事や夫へのサービスのし残し感については、思ったより(専業と有職主婦の間で)差がない(図28、図29、図30)。子どもについてもっとしてやりたいことは「もっと勉強をみてあげたい」「手作りのおやつを食べさせたい」「手作りの服を着せたい」である(図31)。そしてその思いは、働く母親のほうが専業主婦よりはるかに強い。しかし実際に子どもにしてやっていることについては、思ったほどの差が見られない(図32、図33)。

調査レポート／働くお母さん(2)

要　約

⑦幸せ感をめぐって

働く母親で、自分を「苦労が多い」としている者はわずか1割強にすぎず、全体としてはおおむね幸せ感をもっている(図36)。

⑧仕事をやめたいと思ったこと

仕事をやめたいと1度かそれ以上思ったことのある者は54%だが、「しょっちゅうある」はわずか8%。たいていがそうした時期を乗り越えている(図37)。

⑨子どもへの満足度

子どもの勉強の成績や才能については不満がわりとあるが、「健康」で「親子関係」もうまくいっていると評価している者が多く、満足度はけっこう高い(図38)。

調査概要

1.調査主題　働くお母さん

2.調査視点　今日、働く母親の姿は一般化しつつあるなかで、母親の就労と子育てや家事をどう両立させようとしているのか、働くことの意義をどう受けとめているかを探る。

3.調査項目　家族構成について／仕事を続けている理由／家族は母親の仕事に協力的か／ふだんの日の生活について／生まれ変わるとしたらどんな一生を送りたいか

⑩本当はどう生きたかったか

何らかの形で仕事をもって生きることを理想とする者は88%もあり、中でも強い仕事志向を示す者は4割に達する(図39)。

⑪母親の働くことの子どもへの影響

母親の就労が、子どもに悪い影響を与えると考える者は、わずか6%しかいない。全体として働く母親は、自分の働くことをかなり積極的に受けとめている(図41、図42)。

4.調査時期　昭和62年1月～2月
5.調査対象　小学1年～6年生の子どもを持つ母親
6.調査方法　学校通しによる質問紙調査

7．サンプル数　(人)

性別＼学年	1	2	3	4	5	6	計
男　子	77	203	112	107	165	194	858
女　子	83	220	98	137	127	146	811
計	160	423	210	244	292	340	1,669

1. 働く母親たちの実態

働く母親の姿を子どもたちがどう受けとめているか、というテーマで子ども調査が行われてから（『モノグラフ・小学生ナウ』vol.2－7、昭和57年）5年の歳月をへた。今日では働く母親の姿はますます一般化してきている。今回は母親の側で、自分たちの就労と子育てや家事とをどう両立させようとしているか、またその結果自分の働くことの意義をどう受けとめているかについて、母親調査を行った。なおデータの一部はこの号に掲載しきれなかったので、来年度、新しく子ども調査のデータを補足して続報を、とも考えている。

母親たちの属性

まずはじめにサンプルとなった母親たちの属性を図1から図5までに掲げた。

調査サンプルの中心は、30代後半から40代にかけての層で、学歴は高校卒か短大卒が多い。子どもは2人、夫婦と合わせ4人の核家族世帯がほとんどである。何らかの事情で夫が不在の家庭は5％ほど。また、祖父母との同居率は1割に満たない状況である。調査対象地域は、東京の住宅地と千葉県内の団地（現在分譲中のところと、分譲後15年がたち再度若い世代が転入しつつあるところ）であり、たいていの家庭が長期の住宅ローンを抱え、家計のやりくりをしている世代と考えてよさそうだ。

調査サンプルのうち、職業をもっている母親は59％（985名）、専業主婦が41％（684名）であった（図6）。

図1　母親の年齢

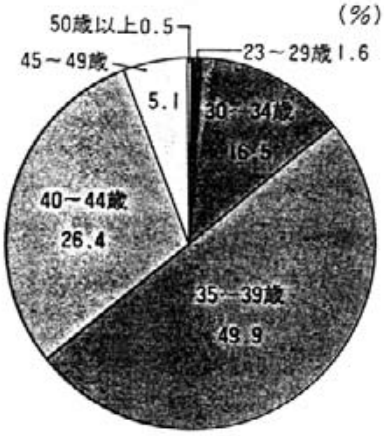


図2　母親の最終学校

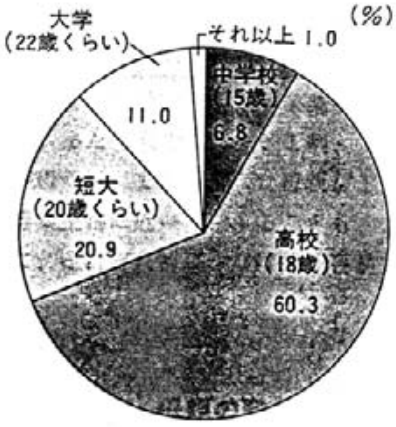


図3　子どもの数

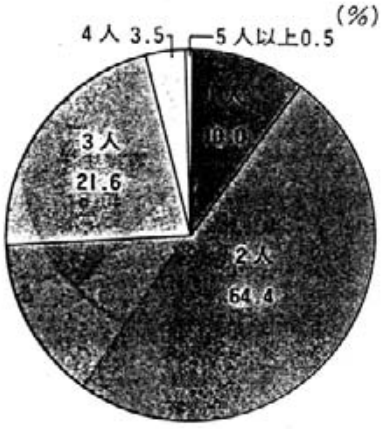


図4　家族の人数

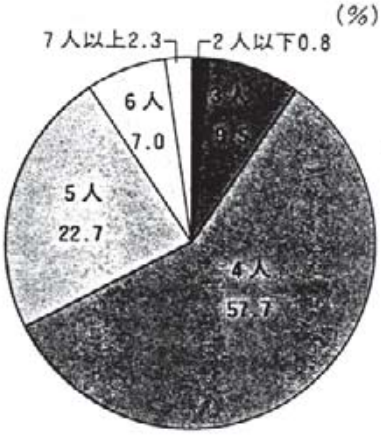


図5　同居している家族

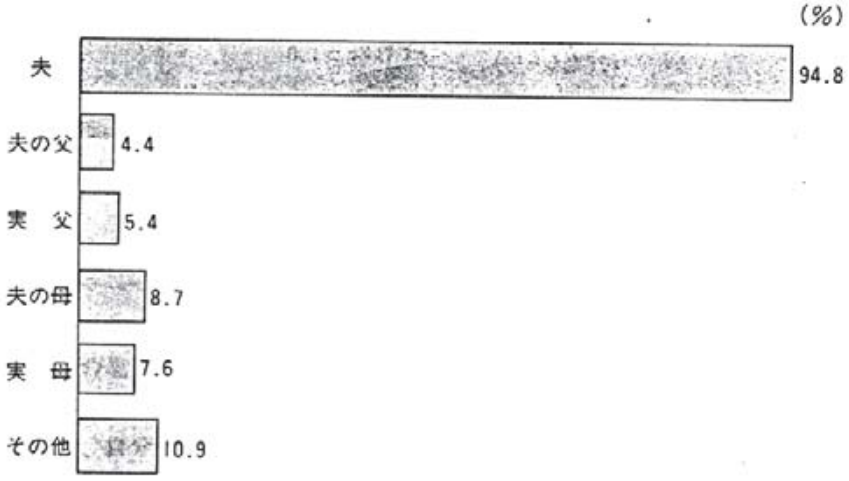
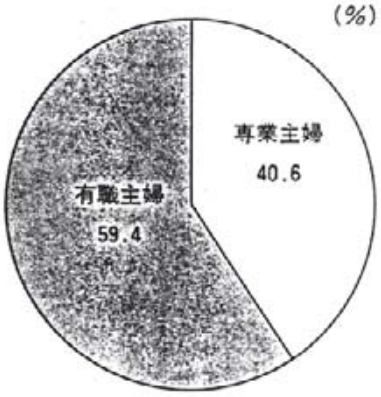


図6　母親の就業率



その就労パターン

図7に、フルタイム勤務からおけいこごとの教師まで、6つの職種に分けて母親の職業をたずねた結果を示した。フルタイムで働く母親は全体の21%、パートタイムで働く母親が42%と6割以上はつとめに出るかたちで仕事をしている。自営業の手伝いや家でのアルバイト（内職）といった在宅組は3割ほど。1週間の就労日数は、図8のように5～6日が圧倒的に多い。日曜日はお休みというケースが7割（図9）であるから、月曜日から土曜日までふだんの生活にしっかり仕事のスケジュールが組み込まれている様子である。職種別に見ると、「自分でお店をしている」母親は休日返上で仕事に打ち込んでおり、パートタイムの母親は家事・育児をこなした後のゆとりの時間に仕事をしている。また「家でアルバイト(内職)をしている」母親は、まだ手のかかる子どももいて、最も専業主婦に近い生活をしているといったように、それぞれ特徴的なライフスタイルが見られそうである。

母親の1か月分の収入については、図10の8ランクにまとめてみた。職種や就労日数によって収入のひらきは大きく、中には月収100万円以上という母親もいる。全体では、扶養控除が認められる範囲（年収90万円までのいわゆる主婦のアルバイト程度）の者は4割弱であり、高収入を得ている層が予想以上に多い。

結婚、出産、育児と母親として最も大変な何年かをどう乗り切るか――仕事をもつ母親たちが必ず直面する壁である。今、仕事をもつ母親のうち、どれだけの人がこの壁をクリアできたのだろうか。図11を見ると、とにかく卒業以来ずっとその仕事を続けている母親が1割、1度やめてしばらくして職場復帰した母親が1割という結果である。ずっと続けることも、1度やめて復帰することも現実にはそう容易でないことがわかる。

図7　母親の職業種別

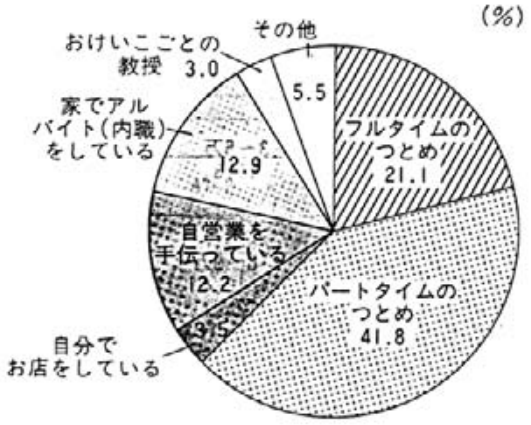


図８　就労日数（１週間で）

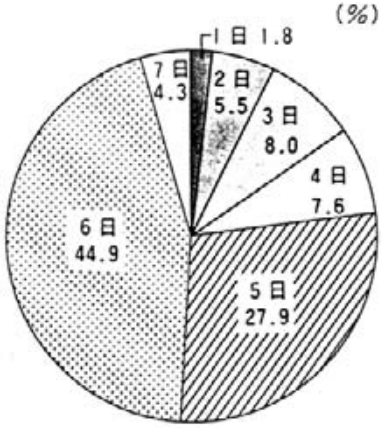


図９　日曜日は休みか

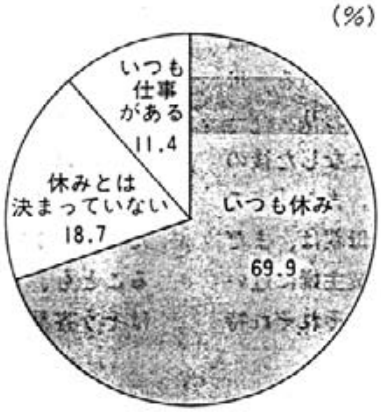


図10　母親の収入（１か月で）

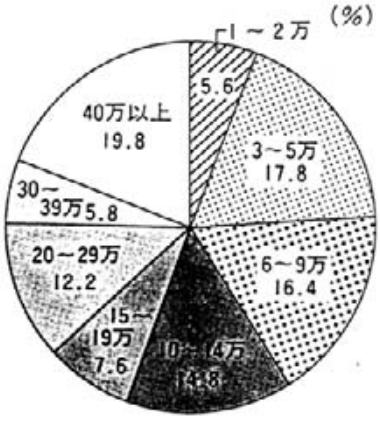
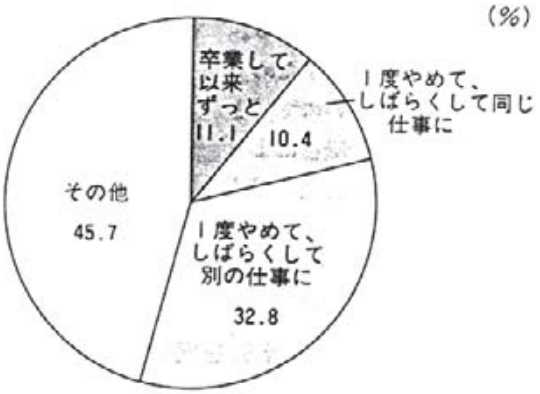


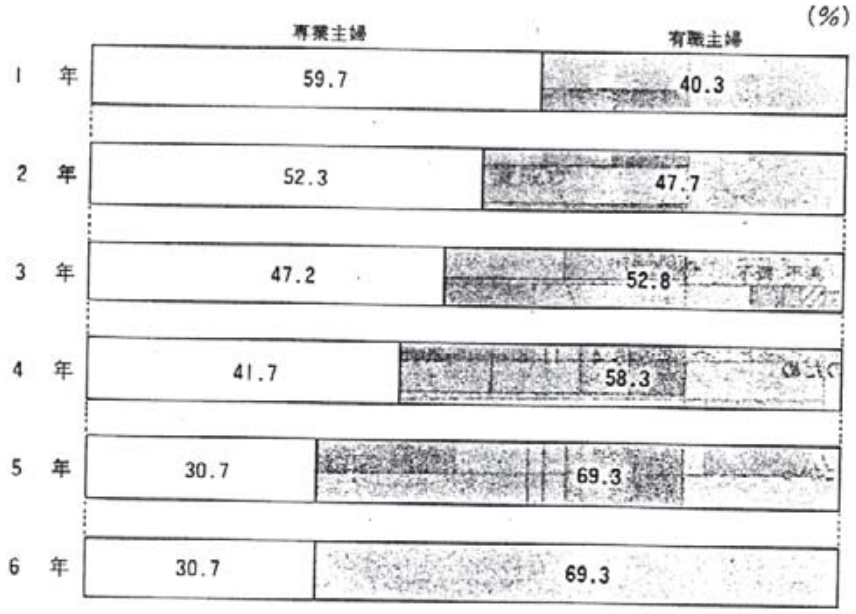
図11　その仕事についた時期



なぜ、いま働いているのか

子育てのために家にこもっていた母親たちが、子どもの成長につれて、次第に職を求めて社会に出ていく様子が、図12にも示されている。子どもが3年生になるころ、専業と有職が半々になり、5年生では7割の母親が仕事をもつようになる。子どもに手がかからなくなった分だけ時間的ゆとりができ「遊んでいてはもったいないので」と仕事へ向かう

図12　子どもの学年と就業率



というのが、母親たちの動機のようである。図は省略したが、巻末の集計表を見ると、パートタイムで働く母親のほとんどが、こうした動機で新しく職場を開拓し、働き始めている。さらに、「暮らしにゆとりを生み出すため」「自分で自由に使えるお金がほしいので」といった理由をあげる母親も多い。職種によって就労の動機は多少異なるが、図13に働く母親全体のデータを掲げた。「毎日の暮らしを支えるため」「家のローンなどの支払いのため」といった切実な声もある。また、「自分の能力を生かしたい」という思いも強い。むろん「遊んでいてはもったいないので」もあり、母親の働く動機が極めて多様化していることを実感させられる。

図13　仕事を続けている理由

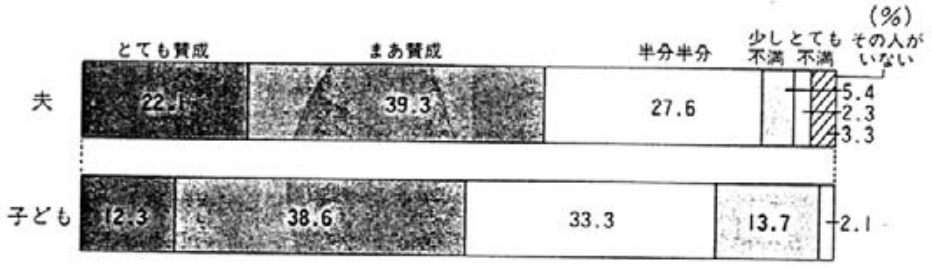
家族の支持

このように様々な動機から働いている母親の姿を、家族は一体どう受けとめているのだろうか。母親が感じとっている家族の支持の度合いを図14に示した。夫について見れば、「とても賛成」が2割。「まあ賛成」を含めると6割にも達する。「半分半分」まで加えると9割。しかし子どものほうは、父親より少し賛成率が下がっているのが気になるところである。それでも「少し・とても不満」な子は2割には達しない。家族の者たちをまあまあ納得させて働いていることになるが、そうした支持を取りつけるための母親の努力も大きいのではなかろうか。

そうした情緒的支持に続いて、家族の家事参加、すなわち具体的レベルでの母親への協力ぶりを見てみよう。図15に示したように、まず全体としては、夫も子どもも家事にはあまり協力的でないのが目につく。夫の例をとれば、「とても・わりと・少し手伝ってくれる」を合わせると5割は超えるものの、手伝いとは本来「かなり」手伝うのでなければ、助けにはならない。せいぜい「わりと手伝う」くらいまでしか、家事協力者としてはカウントできないのではなかろうか。「少し」手伝うくらいは手伝うというより、家族の一員としては当然というか、自分のことを自分でしている分にも当たらないし、「あまり・全く手伝わない」に至っては論外だ。とすると、「手伝ってくれる」夫は25%、子ども26%という低い数字しか得られていないことになる。

さて働く母親の最大の支え手はやはり「おばあちゃん」で、全体の中では「手伝ってくれる」割合は18%だが、おばあちゃんのいる家庭だけについて計算し直すと、66%もの割合になる。この点を具体的に示したのが図16である。専業主婦のいる家庭では、おばあちゃんはほとんど何もしていない。これではかえっておばあちゃんのためにもよくないのではないかと思えるほどだが、母親が働く家庭のおばあちゃんは、家事のほとんどをよく分担している。なお、この図の数字は「おばあちゃんの仕事としてまかせてある」割合だが、これに、「おばあちゃんか母親か気がついたほうがしている」という家庭も加えると、おばあちゃんの協力があってこそ働けるのだ、という感じのケースも多いのではなかろうか。

図14　仕事に賛成か



ただし、おばあちゃんがいても母親がもっぱらしているのは図の下の２項目で、「学校行事への参加としつけ」に関しては何とか母親がしようとしている姿が伝わってくる。

しかし図15に戻ると、いくらおばあちゃんの働きが役立っているとは言っても、おばあちゃんのいる家は３割ほどでしかないのだから、あとの家庭では、働く母親が家事にも孤軍奮闘している感じである。これでは「母親が働くことに賛成」とは言えないのではなかろうか。むしろこれでは「お母さん、どうぞお好きなように」なのではなかろうか。いろいろ動機はあっても、結局は母親は父親と同じように家族のために働いているのだから、もっと家族に家事分担をさせてもいいのではなかろうか。とくに子どもの場合はそうだろう。夫の場合は、図17に示したように仕事の場が様々だが、それにしても自分のことくらいはもう少し自分でさせたほうがよいケースもありそうだ。

図15　家族の協力

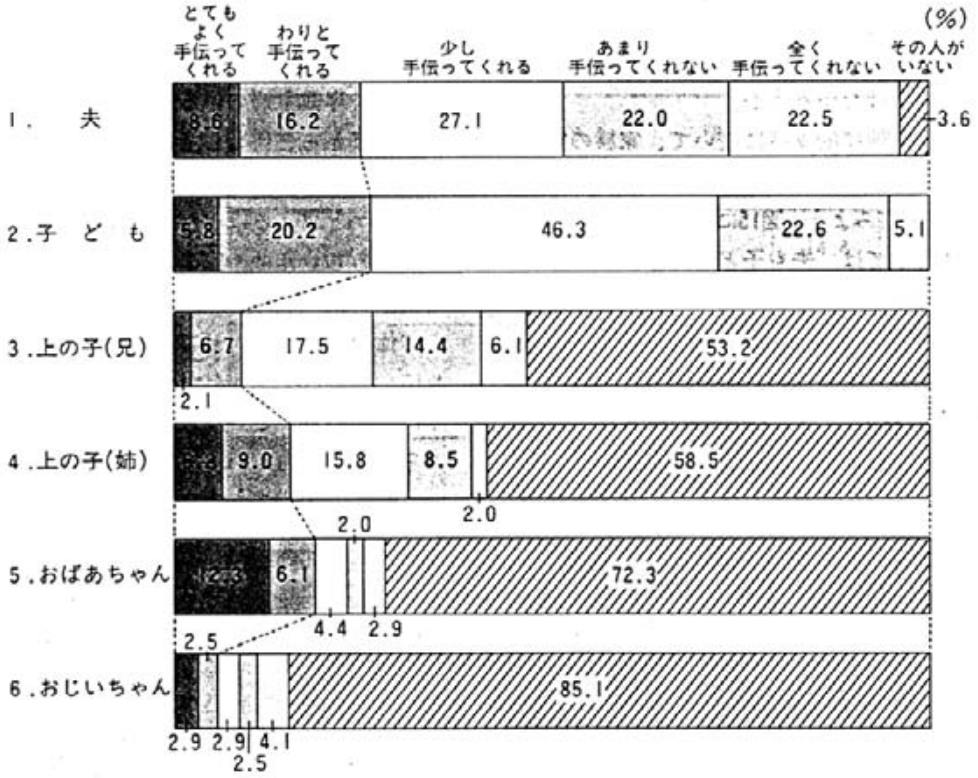


図16　おばあちゃんの仕事

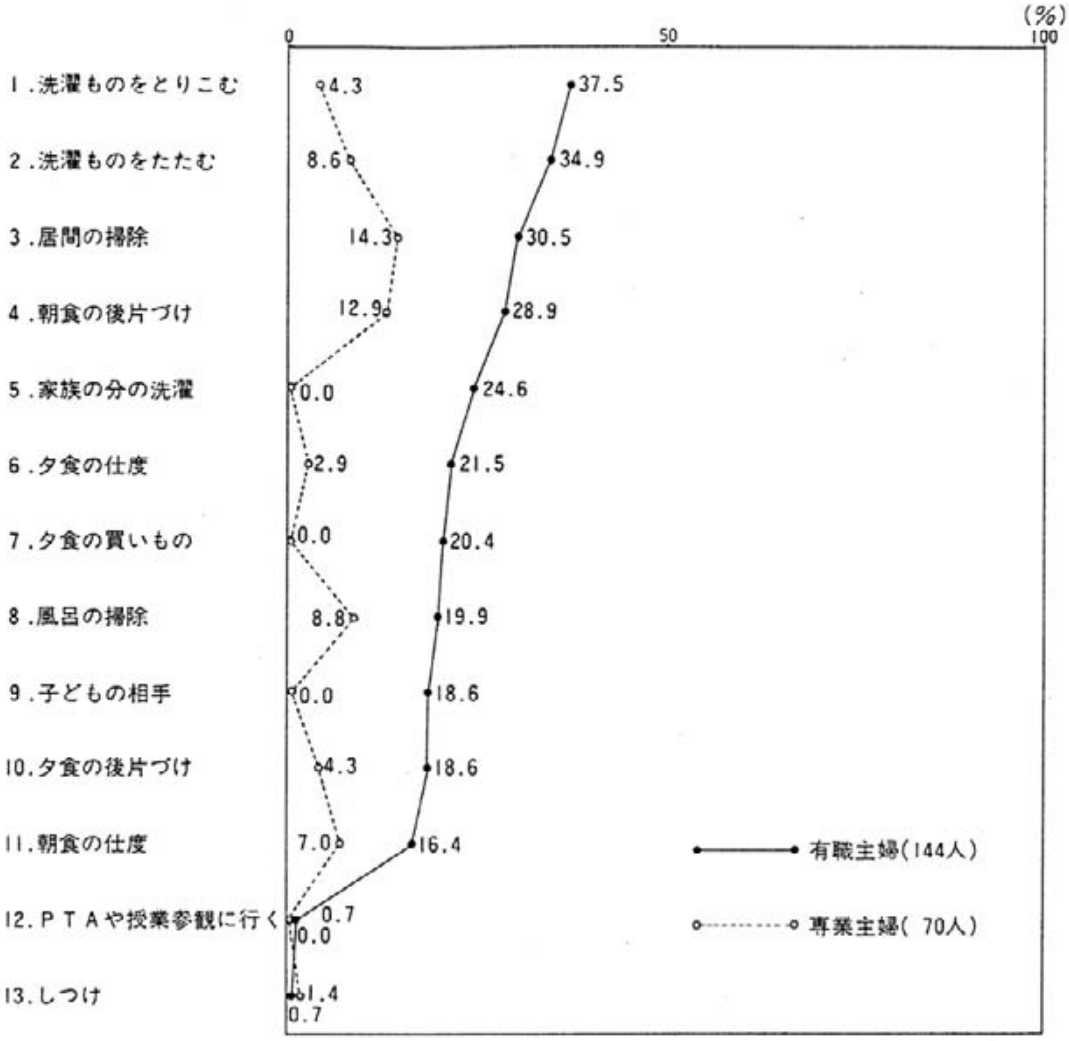
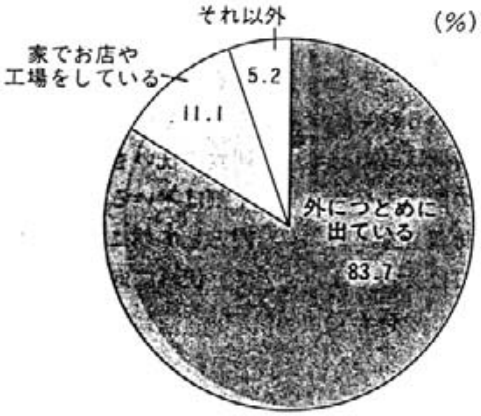
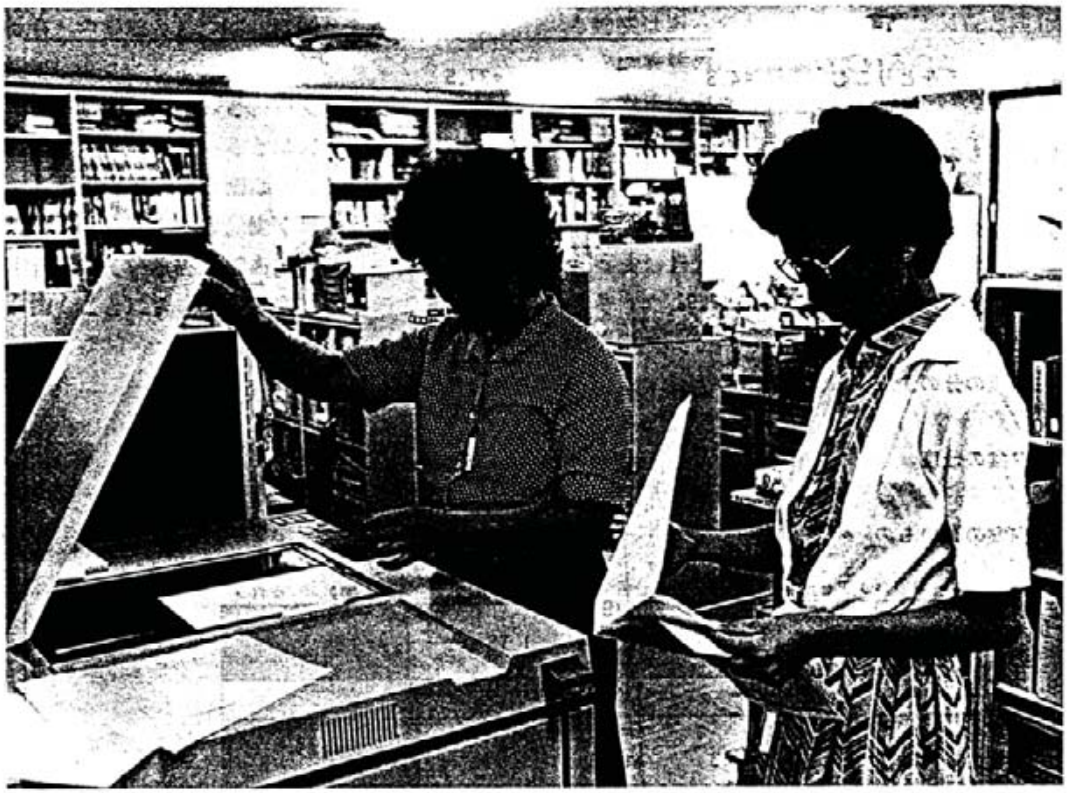


図17　夫の勤務形態



2. 働く母親の一日を追って

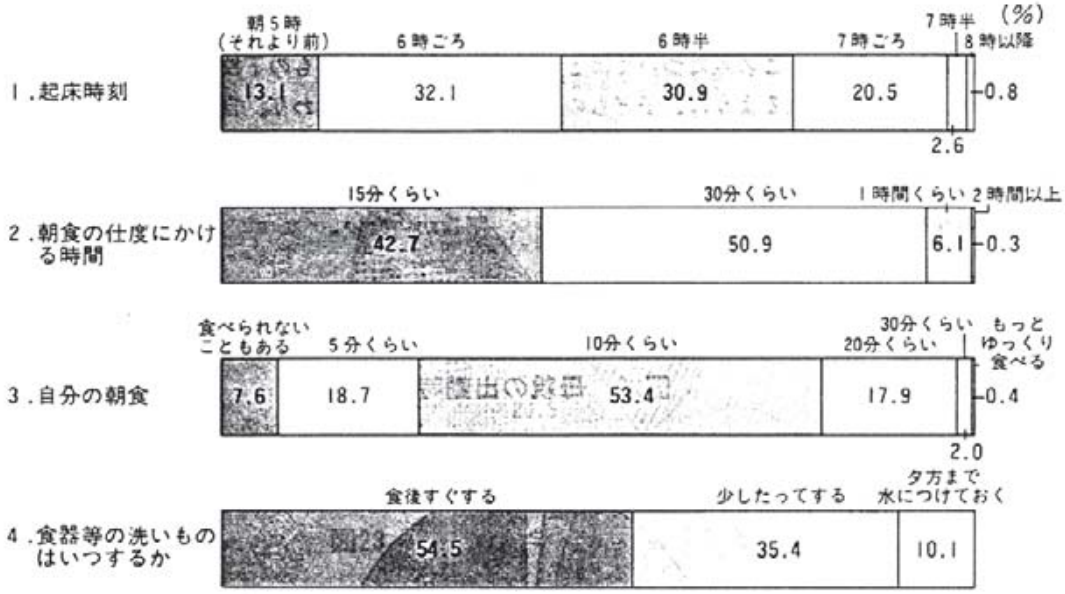


働く母親は、家庭と仕事を両立させるためにどんな努力や工夫をしているか——仕事をもっている者同士、気にかかっていながらほとんど情報は交わされていないようにも思われる。周囲の者にはわからなくとも、おそらくそれぞれに工夫しながら自分なりの生活のペースを作っているに違いない。そうした観点で、働く母親の一日を追ってみよう。

朝の忙しさ

まず、図18に起床と朝食に関するデータをまとめた。働く母親の朝はたいてい6時半には始まる。朝食の仕度にかける時間はせいぜい30分ほどであるから、出勤までの間に1～2時間残されている。それでも、母親自身が朝食にかける時間は5～10分で、日によっては食べられないこともあるほどせわしい様子である。出勤前に洗濯、食器洗いをすませ、夫や子どもの世話もしてということだろうか。朝食の洗いものを放ったまま飛び出す母親も1割ほどいる。しかし、たいていの母親は主婦として朝にするべき家事を大急ぎでこなして、仕事に向かっていると言えそうだ。

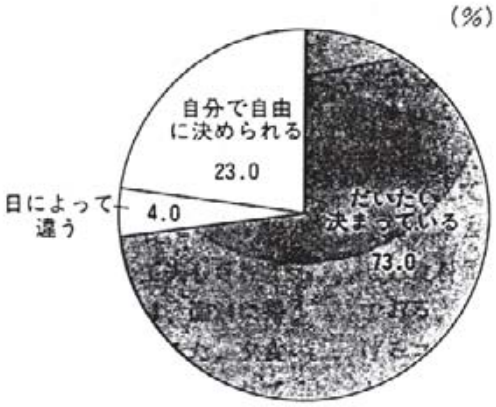
図18　朝の時間



母親の出勤形態

図19のように、いつも決まった時刻に出勤していく母親が多い。子どもが登校した後、8時～9時ごろにというのが一般的なようである（図20）。同様に帰宅時刻についても、毎日決まった時間にという母親がほとんどである（図21）。帰宅時刻にはやや幅があるが、図22に示したように、たいてい午後4時から6時の間には帰っている。子どもが学校から帰る時刻に戻れる母親は、4分の1しかいない。一方、夜だいぶ遅くならないと帰れない

図19　母親の出勤形態



仕事についている母親も、1割はいる。

さて、子どもが学校から帰ったとき、「おかえり」と温かく迎え入れてやれないことの無念さは、働く母親にとっての共通の思いとしばしば言われてきた。この点についてはどうだろう。図23に見られるように、子どもの帰宅時には、自分でなくともたいていだれかがいるようにしている母親が7割にのぼる。仕事というものは、そうそう自分に都合のよいようにはできていない。母親たちは、せめて子どもを送り出してから出勤できる仕事を（ときには自分にとってより魅力的な条件の仕事をあきらめて）選択しているのであろうが、終業も子どもの下校前にとはいかないのだろう。その代わり、自分でなくとも「だれかいる」ようにする工夫がなされているのか、子どもを全くのカギッ子にしている母親は1割しかいない。

図20　母親の出勤時刻

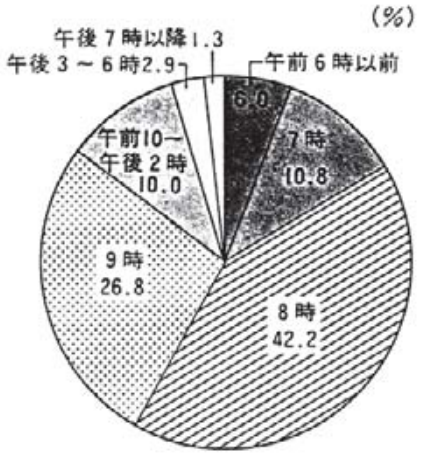


図21　母親の帰宅

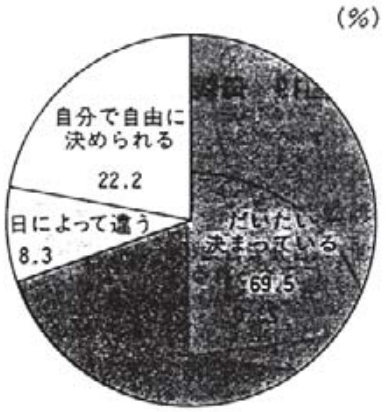


図22　母親の帰宅時刻

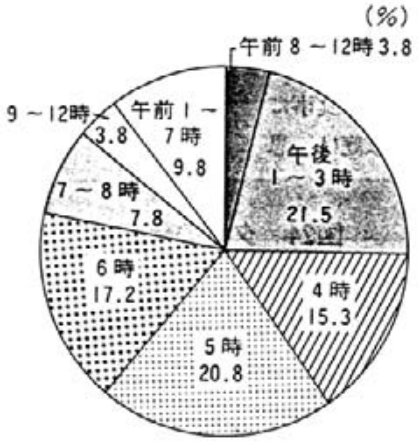
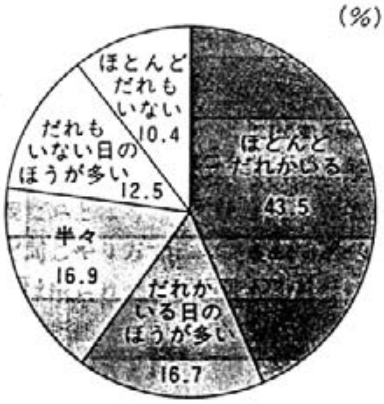


図23　子どもが学校から帰るころ



夕食作りの工夫

おなかをすかせて待っている子どもたちのために、要領よく夕食の仕度をする役目は、正直に言って大変だ。働く母親の中でも、帰宅が夕方6時すぎのつとめになると、一層せわしい。毎日のことだけに、夕食作りに関しては、それぞれひと工夫もふた工夫もされているのではなかろうか。ここでは、図24に掲げた5つの項目についてたずねてみた。夕食の仕度は1時間くらいですませるようにしているというが、「夕食材料の宅配や冷凍食品・レトルト食品の利用、そうざい屋ででき上がったものを買う」のどの項目にも、それほど反応されていない。最も条件が異なる専業とフルタイムの母親の回答を比較しても、せいぜい食料品のまとめ買いに差が見られる程度である。パッパと手際よく30分以内に作り上げるコツをつかんで、それほど手抜きをせずがんばっているのが、働く母親たちの姿（図

25）かもしれない。とすれば、逆に専業主婦たちはもう少しがんばってもいいのでは、と言いたくなる。

図26は、夕食の様子についてである。夕食はやはりくつろいで、30分～1時間くらいかけて食べる家庭がほとんどである。母親が忙しいからといって、ふだんの日に外へ食事に行ったり、出前を取ってすませる家庭は、思ったより少ない。また巻末の集計表に示すように、どの項目も、より時間のゆとりのないフルタイムで働く母親と専業主婦の家庭間ですら差がない。働く母親がしっかり家事をがんばっている様子が見られるものの、これではかなりの努力と無理が重なっているのではないか、と懸念もしてしまう。

図24　夕食の仕度

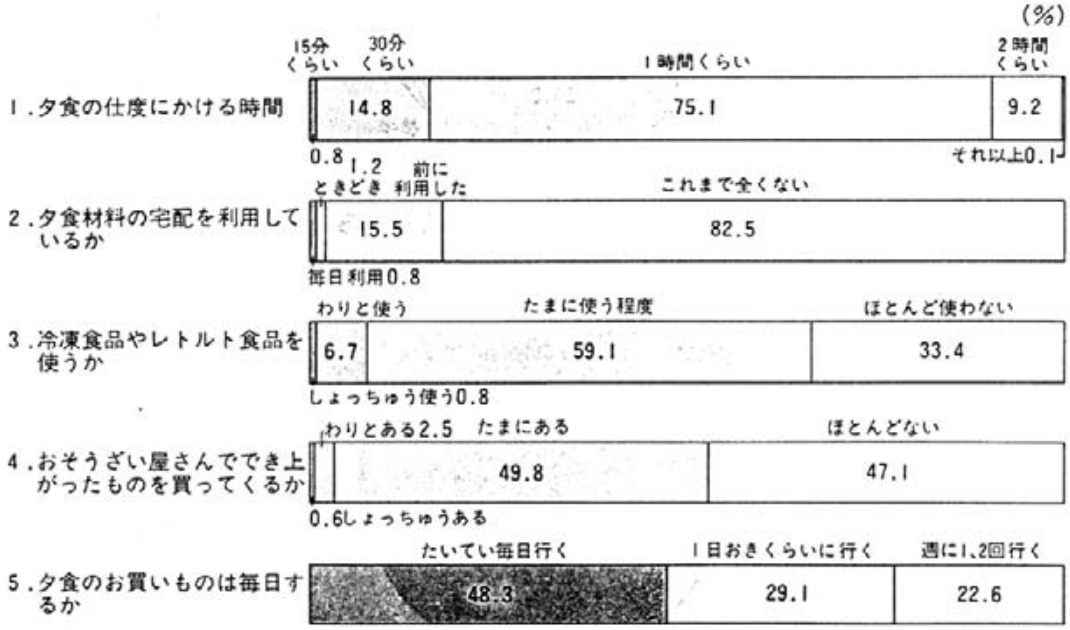


図25　夕食の用意

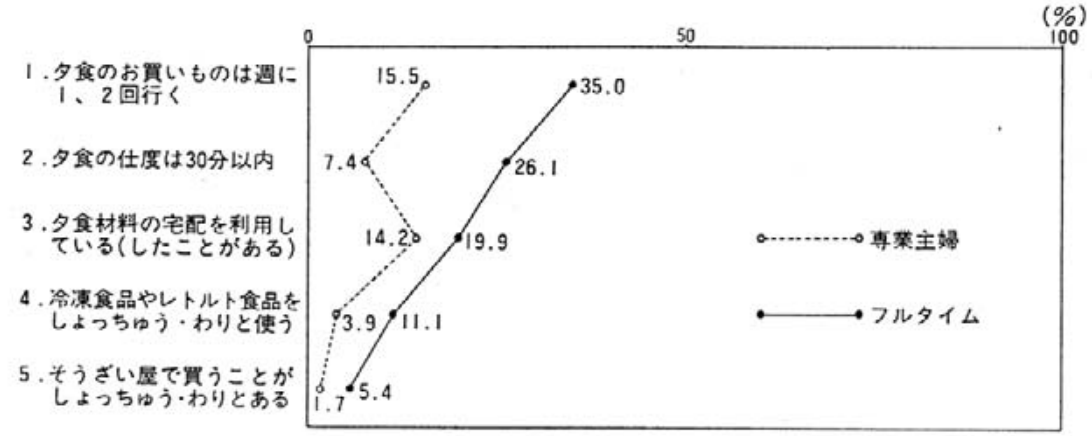
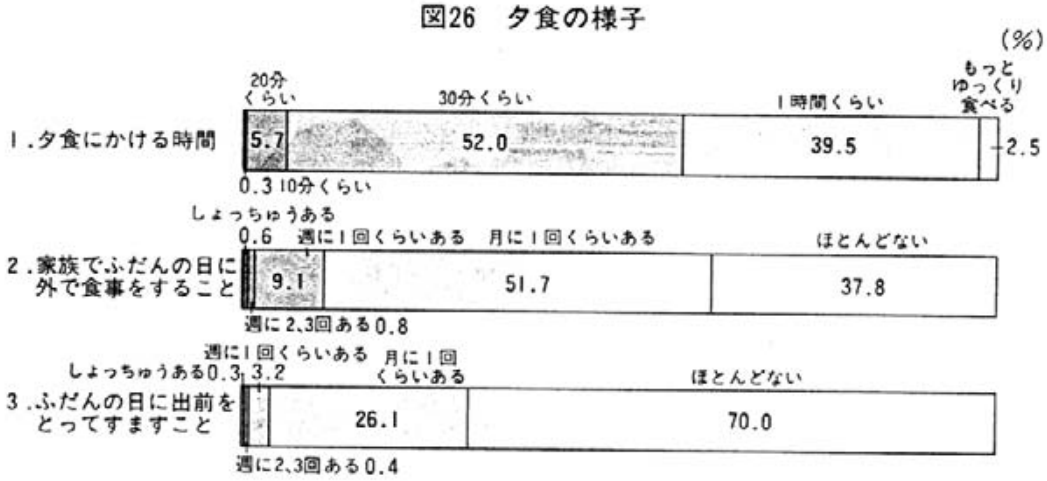


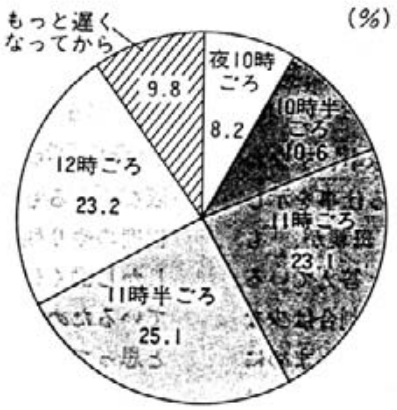
図26　夕食の様子



一日を終えて

朝6時前から始まった忙しい一日を終えて、働く母親たちが寝入る時刻をたずねると図27の通りになる。専業主婦の母親たちとほとんど同じだけの家事を、ほとんど同じやり方でこなしていけば、当然睡眠時間は削られてしまう。長時間仕事に携わっている母親ほど、ゆとりのない生活を続けていることが考えられる。逆に言えば、家事の省力化はしても、それ以上家事を分担してくれる家族もなくて子育てに気を抜けない母親たちが、ゆとりをもって選べるのがパートタイムの仕事なのかもしれない。この点については、また別の機会に資料をもって明らかにしてみたい。

図27　母親の就寝時刻



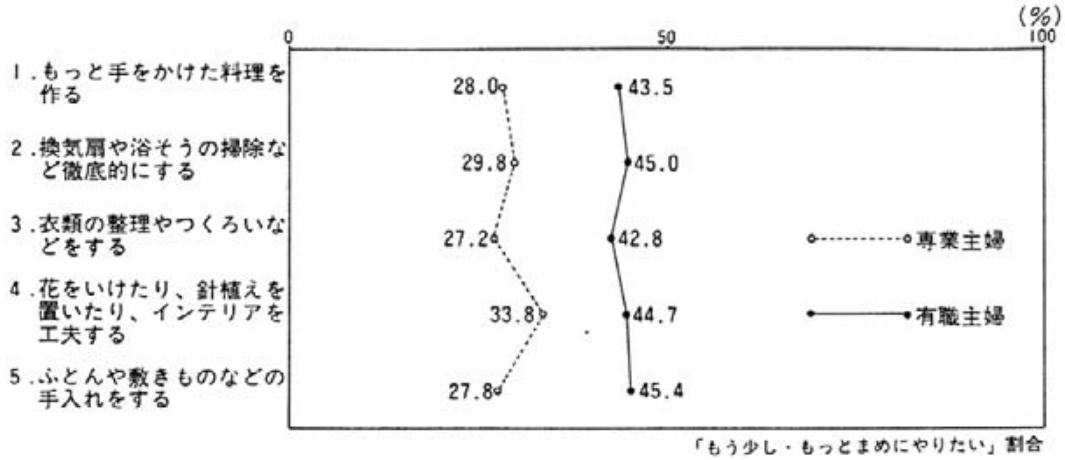
3. 家族にしてあげたいこと

働く主婦と言えば、髪ふり乱して家路へ急ぎ、夕食の用意をし、その後片づけも含めて休む間もなく家族のために働いて、身も心もクタクタになりながら、なおかつ家事にも子育てにも、家族の世話にも行き届かないところだらけで、いつも欲求不満と自責の感情が身をかむ——といったイメージがないでもない。しかし実際はどうなのだろう。この章では、主婦として母親としてのそうした思いにスポットをあててみよう。

家事について

図28は時間があったらしたい家事、すなわち手が回らなくて気になっている仕事を示した。どの項目も5割近くの働く母親が、「もう少し・もっとまめにやりたい」と答えている。しかし図中の専業主婦の場合も、割合は少ないが、3割近くが「もう少し・もっとまめにやりたい」と答えているのだから、その差は2割でしかない。考えてみると家事とはさい限なくあるものだから、主婦ならだれもある程度のやり残し感のようなものがありそうだ。しかし働く母親はその場合にも「自分が働いているためにできなくて家族に申し訳ない」と思ってしまうのではなかろうか。

図28　時間があったらしたいこと
——家事について——



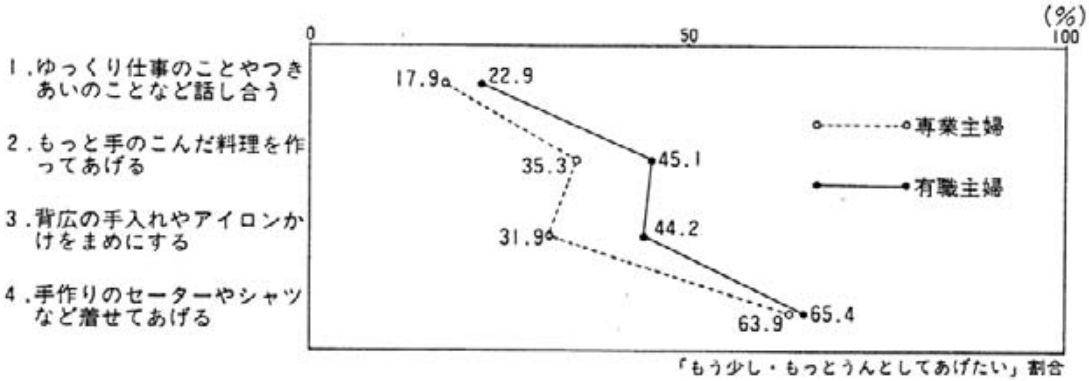
夫について

では夫の世話についてはどうか。図29では働いているといないとで、ほとんどやり残し感に差が見られないのがおもしろい。全体として最も夫にしていないのは「手作りのものを着せること」、一番よくしているのは「おしゃべり」ということのようである。

また図30は、実際に夫にしてやっていることを、働いている母親と専業主婦とに分けてたずねたものだ。図の下に位置する項目は、昔、主婦たち（とくにつとめ人の妻たち）がしたサービスだが、今ではこうしたこまめなサービスをする主婦たちは、ほとんどいなくなりつつあることがわかる。たいていの主婦がしているのは（それも7～8割だが）「朝食作り、お茶をいれる、ふとんしき」くらいしかない。また図29に示されたように、有職と専業の主婦の間でたいした差がない点は、ここにもよく表れている。つまり、妻が働いていようといまいと、今は夫は妻からのサービスをあまり期待できなくなっている時代なのであろう。

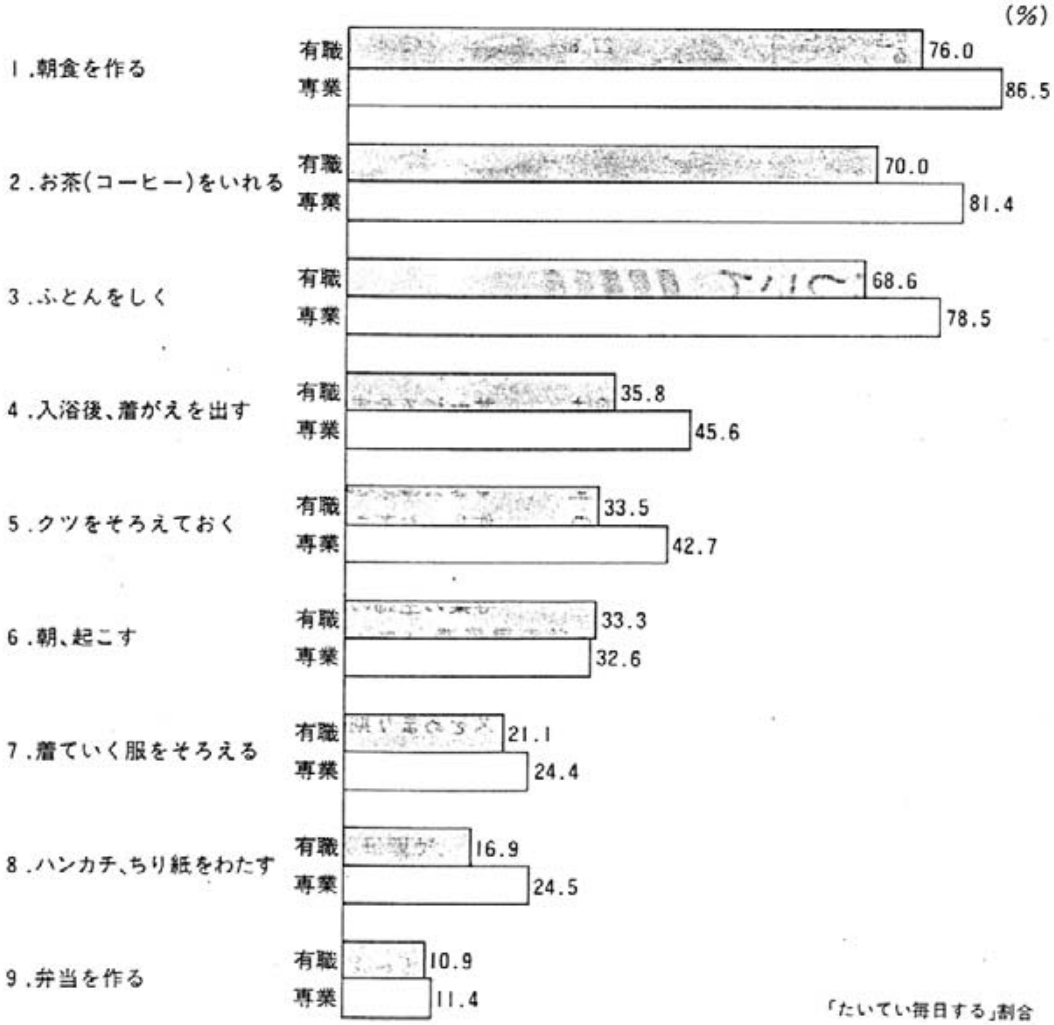
図29　時間があったらしたいこと

――夫の世話では――



「もう少し・もっとうんとしてあげたい」割合

図30　夫にしてあげること



「たいてい毎日する」割合

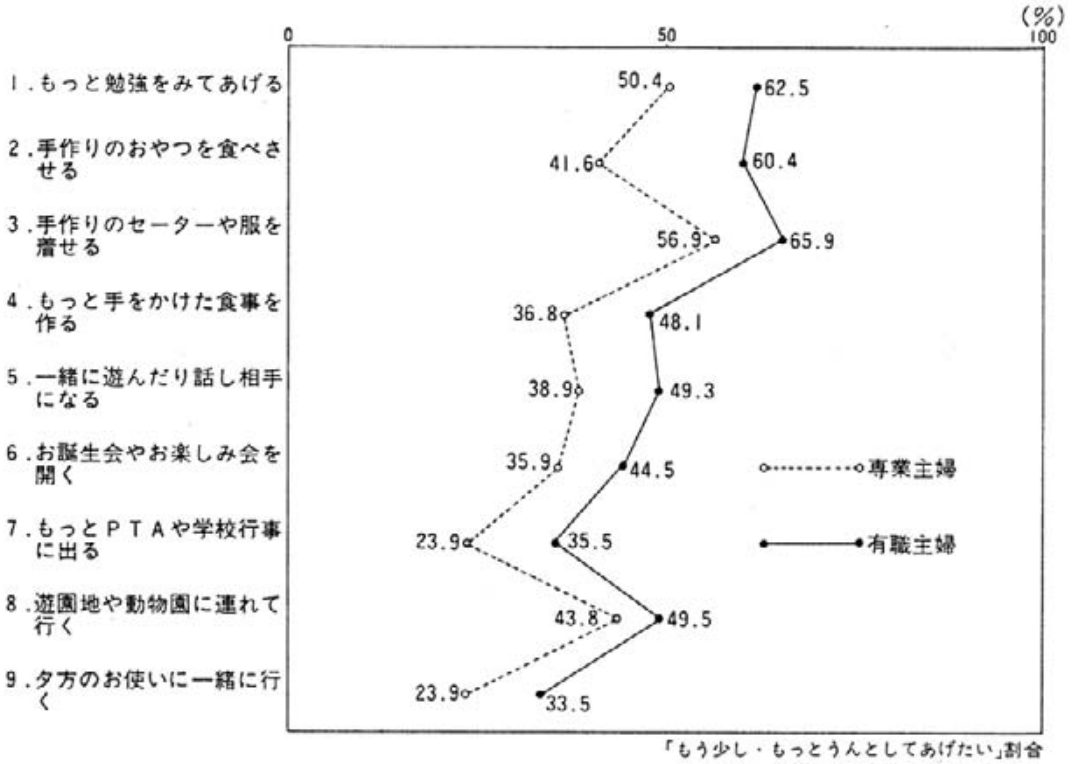
子どもについて

働く母親が子どもについて抱く思いは、図31が示すように、家事や夫へのサービスに比べて一番強いことがわかる。とくに「もっと勉強をみてあげたい」「手作りのおやつを食べさせたい」「手作りのものを着せたい」とする気持ちは、6割を超える働く母親の中にある。しかしこれら上位の3項目は、子どもたちにとってはそれほど期待する項目ではなさそうであり、この辺にひょっとすると両者の気持ちの食い違いも見られそうである。しかも、この点では仕事をもっている母親のほうがかなりその思いが深い。

こうした子どもへの思いについて、では実際に母親とは子どもにどんなサービスをしているものか、図32、図33に示してある。朝は、母親として子どもにしてやることもたいしてなさそうで、正念場は子どもの下校後のように見うけられる。そして全体としては、働いているいないにかかわらず、母親が子どもにしてやっていることには思ったより差がないようである。図の中で両者に大きな差がある項目は、「おかえりと言ってやる」「おやつを出す」「ふとんをしいてやる」くらいでしかない。かんじんのことは、働く母親でもけっこうしていると言えそうだ。

この点に関して、図34は学校行事への参加

図31　もっと子どもにしてあげたいこと



「もう少し・もっとうんとしてあげたい」割合

をみたものだ。「個人面談、運動会などの行事、授業参観」の3つは、働いていても何とかやりくりをして出席している。教育への関心度の高さと、子どもへの配慮が表れた数字と言えそうだ。したがって母親たちは、自分の働いていることが子どもに悪い影響を与えているとは必ずしも思っていない。図35に示したように、子どもに手が回らなかったり、放任してしまったりなど、しばしば働く母親から出てくる反省点をあげて、そうした傾向の有無をたずねてみたが、「とても・わりとそう」と共感を示す者は（学校で何を習っているかわからないを除くと）どれも1割に達しない。ほとんどが「あまり・全くそうでない」と否定側に回っている。自分の働いていることで、子どもへの悪い影響が出ないように、精一杯努力している結果なのだろう。この数字を見れば、専業主婦の中で、子どもへの影響を考えて仕事を断念している人たちにも、何がしかの勇気を与えるのではなかろうか。

図32　子どもにしてあげること(朝)

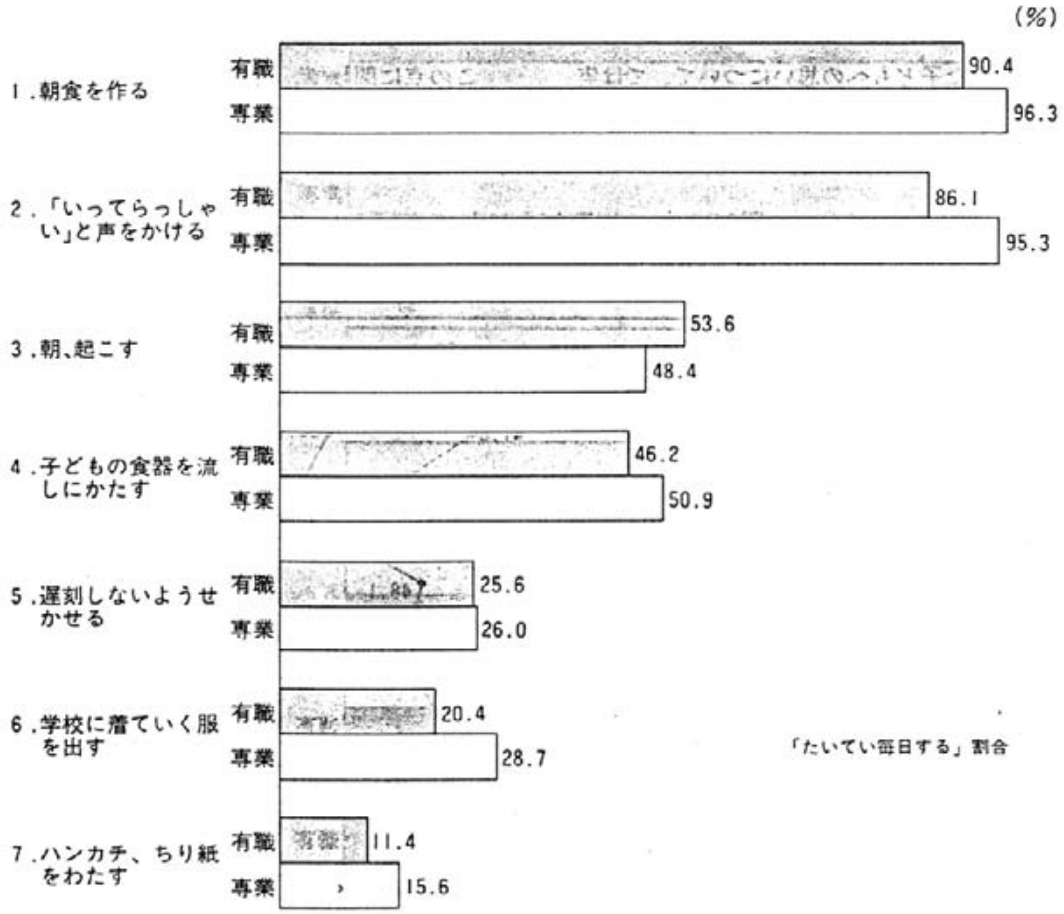


図33　子どもにしてあげること(学校から帰って)

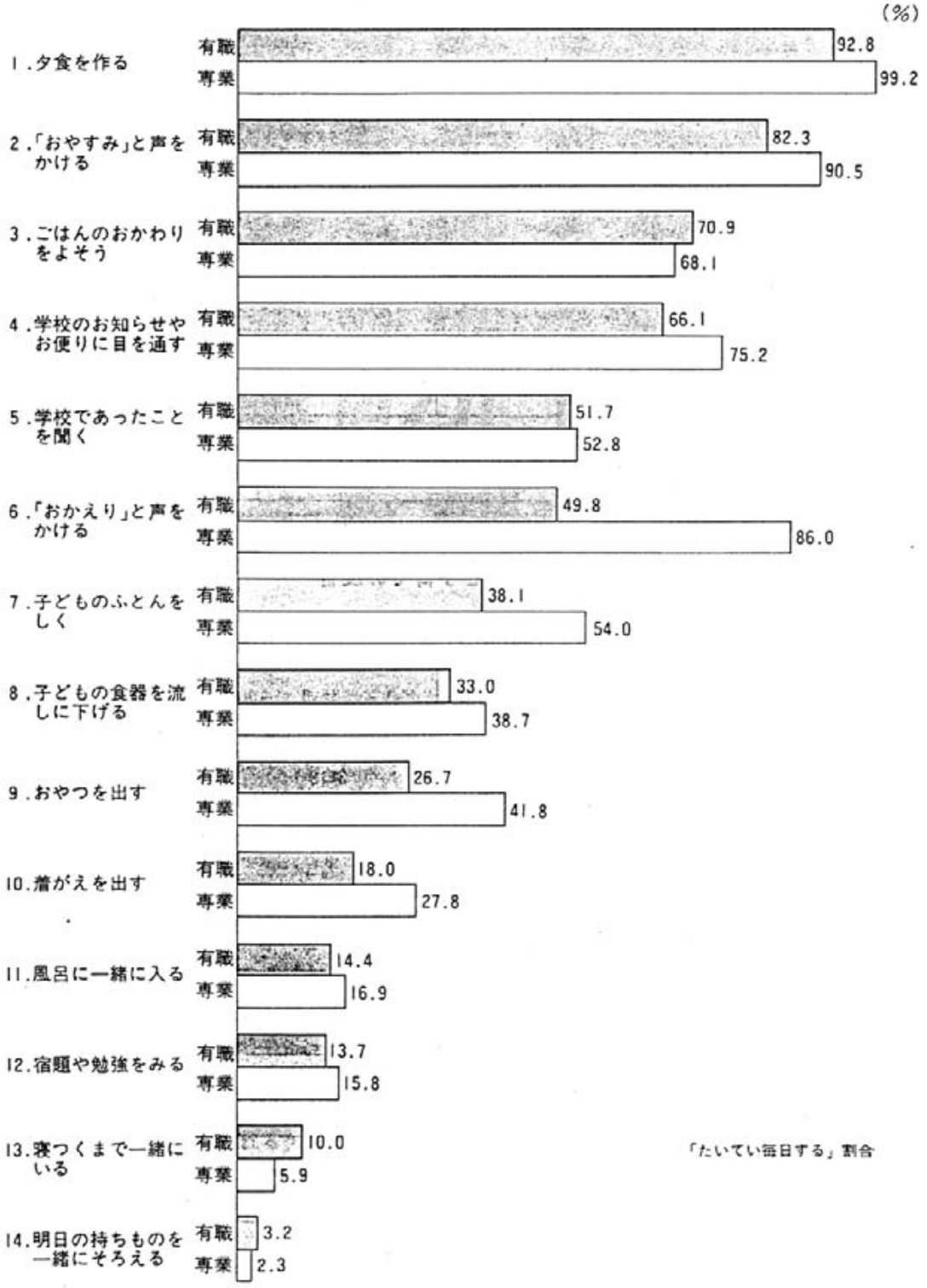


図34　学校へよく行くか
——働く母親——

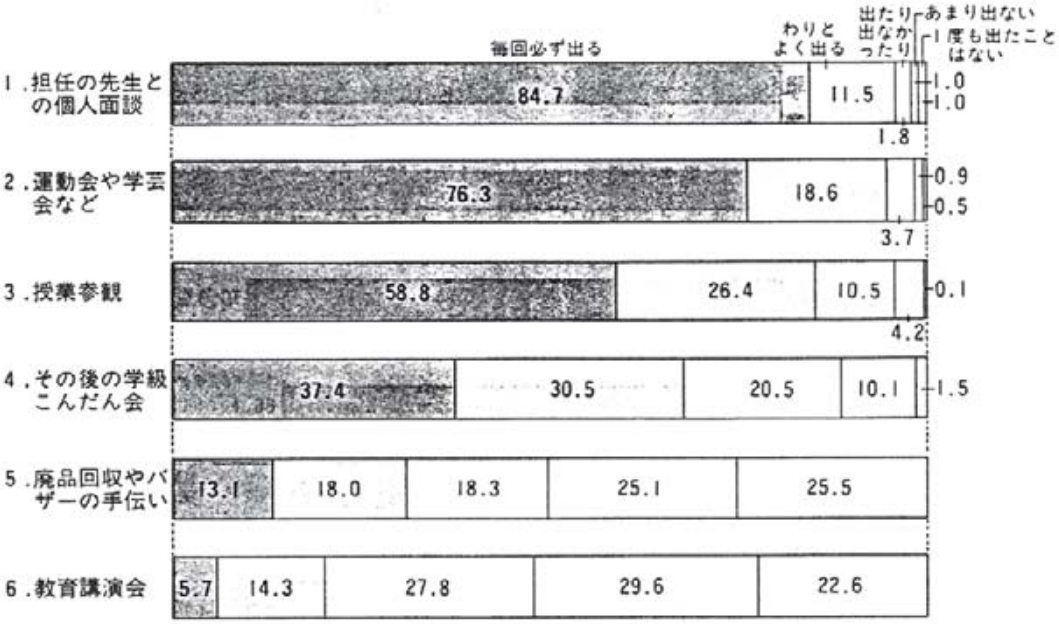
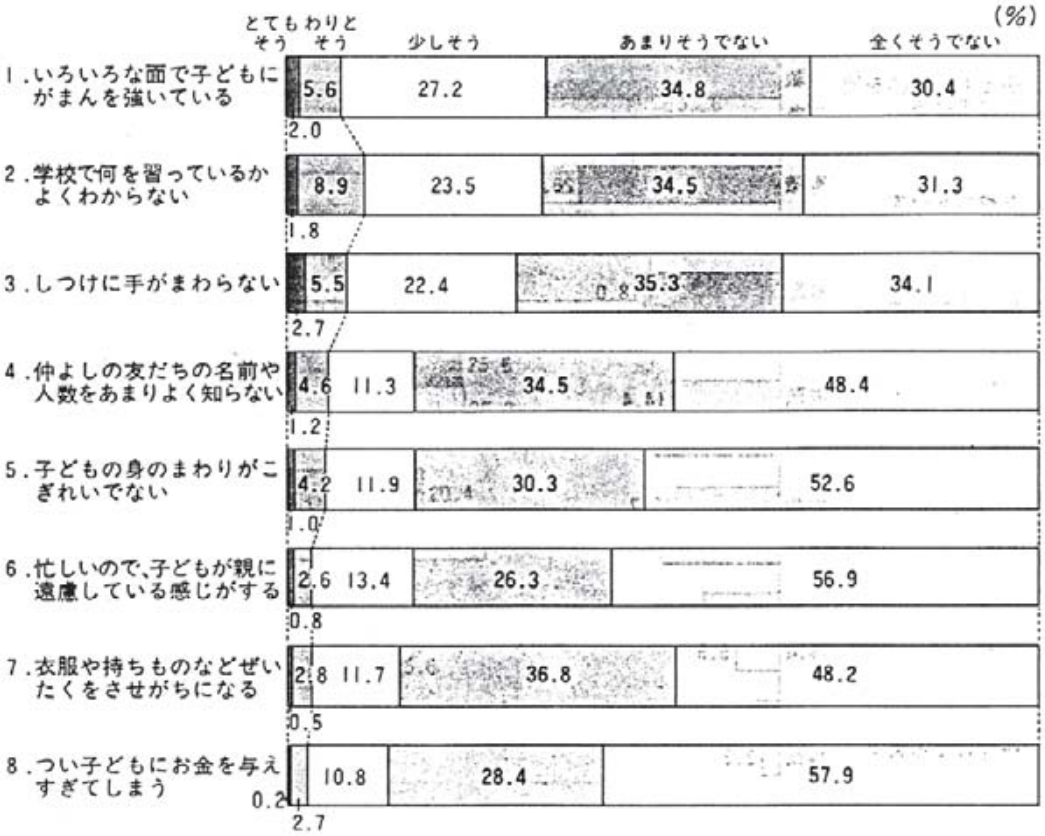


図35　仕事と子育ての反省



4. 母親としてどう生きるか

以上、働く母親たちが毎日何を考え、どう家庭と仕事を両立させようとしているかを、いくつかの側面から見てきた。

これらの数字で見る限り、多くの働く母親は、けっこうゆうゆうと仕事と家庭の両立を果たしているようにも見うけられる。むろん働くといっても、その仕事の内容や勤務条件によって答えはいろいろであろう。そうした細かい分析は、はじめにふれたようにまた後日に回すとして、とにかくここで一応のまとめをしておこう。

自分は幸せか

働く母親とよばれる状態になるまでに、女性たちは何度も人生の節目を通過する。結婚や出産を境に、それまでの人生と大きな方向転換を余儀なくさせられるケースもあるだろう。そして子育ては、働いているとそうでないとにかかわらず常に大事業だし、まして仕事との両立ともなれば、人には言えない苦労だってあるはずだ。

しかしそうした様々な節目をくぐり抜けた今、結論として働く母親たちは、自分の人生をどう受けとめ、どう評価しているのか。図36によれば自分の人生を「とても苦労が多い」とする者はわずか3%。「少し苦労している」が9%と、合わせても1割強にすぎない。あとは程度の差こそあれ、一応「幸せ」と評価されていることがわかる。

ただしこれまでに仕事上のつまずきがなかったわけではないだろう。図37によれば、「仕

事をやめたいと思ったことがありますか」の問いに、「1度もない」と答えた者は46%、「しょっちゅうある」者こそ8%と少ないが、「何回もあった」者は19%もいるし、1、2度を含めると6割に近い母親がそのつまずきを推測させるような回答をよせている。

しかしトータルには図36に示したように、9割が幸せ感をもつのだから、仕事のつまずきはあっても、それをしのぐ充実した体験をしているのに違いない。

その最大のものは、図38に示したように全体としては「子どもに対する満足度」が大きいことによるのかもしれない。勉強や才能の面では満足度が低いものの、健康な子どもに恵まれ、親子関係もうまくいっている。これに勝る喜びや満足は、母親にとっては存在しないものではなかろうか。しかもその満足度はほとんど専業主婦たちと変わらないのである。

図36　幸せ感

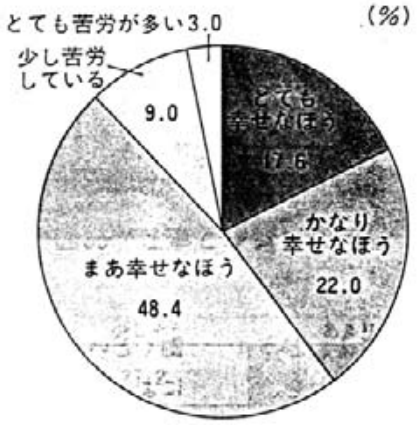


図37　仕事をやめたいと思ったこと

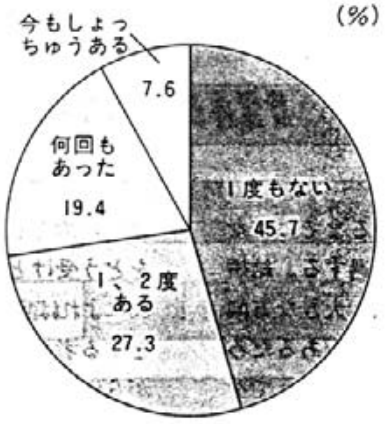
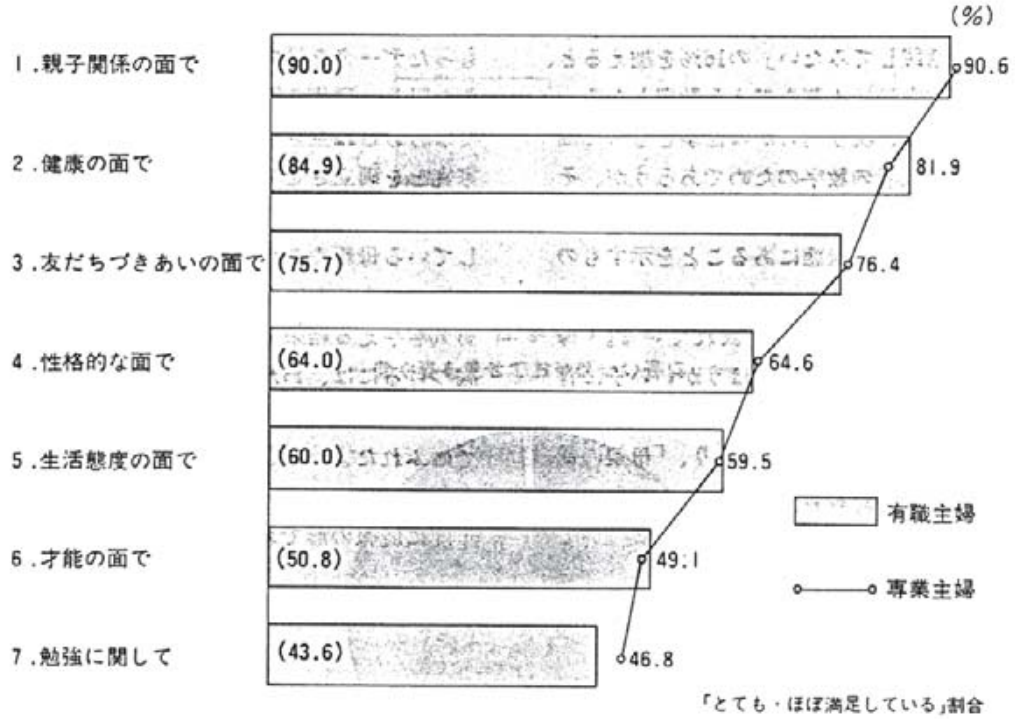


図38　子どもへの満足度



母親たちはどう生きたいか

働く母親が年々増加している現在でも、働く母親に対して注がれる世間のまなざしは、必ずしも好意的であるとは限らない。お母さんが働いていると聞いてストレートに「かわいそうね」と言われた子も多いのではなかろうか。しかし以上のデータから見る限り、母親たちはそうしたまなざしをはね返すかのようにけっこう自分たちの共働きに意欲と自信をもって生活しているようにも思われる。

このレポートを終わるに当たって、そうした母親たちの、仕事を通じての自己実現への意欲といった側面に接近してみることにしよう。

図39は「もう一度生まれ変わることができたら、今度はどう生きたいか」をたずねたものだ。この答えには、母親たちのこれまでの人生に対する評価と共に「本当はこう生きたかった」という人生に対する見果てぬ夢のようなものが表れているのではなかろうか。

図が示すように、全体としては「仕事をもって生きたい」とする就労意欲の強さに、まず驚かされる。「専業主婦として家族につくしたい」は13%にすぎず、残り87%は程度の差こそあれ、仕事をもって生きる人生を望んでいるのである。中でも「結婚にこだわらず、社会で活躍する女性として生きたい」の21%が目をひく。かつては結婚しないで生きる女性の人生など、考えられもしなかった。それ

を２割もの人々が理想とするようになったとは、世の移り変わりの激しさを、改めて感じさせられるデータである。これと「多少家族に不自由をかけても、仕事と家庭を両立させたい」の６％、「家族にも協力してもらってバリバリ活躍してみたい」の16％を加えると、強い仕事志向派は４割を超える数字となる。むろんこれは、現在何らかの仕事をもって働いている母親層の数字のためであろうが、それはとりもなおさず、現に仕事をもっている自分を肯定できる状態にあることを示すものだろう。

このことは図40にもよく表れている。「母親が働く姿を見せておいたほうがいい子に育つ」を肯定する者は、フルタイムの本格的な働く母親では６割を超えており、「母親の就労は子どもに悪い影響を与える」を肯定する者は同じく６％しかいない（この点についての働く母親の意見は、こまかく図41、図42に掲げてある）。それに比べると、やはり専業主婦たちの評価はよりネガティブである。

以上、母親の就労について、種々の角度をもったデータを見てきた。本レポートで見てきた限り、現代の働く母親たちは、全体としてはおおむね生き生きと自信をもって仕事と家庭とを両立させているように見うけられる。その意味でこのデータは、これから働こうとしている母親やこれから人生の節目での選択に迫られることになる若い女性にも、一つの勇気を与える結果であろう。しかしそれを結論づけるには、われわれはもう少しこれらのデータをこまかく見ていく必要があろう。すでにふれたように、働いている日数や職種によって、さらにデータを分析した結果を、来年度に続報の形でお届けしたいと考えている。

図39　もう一度生まれ変われたら

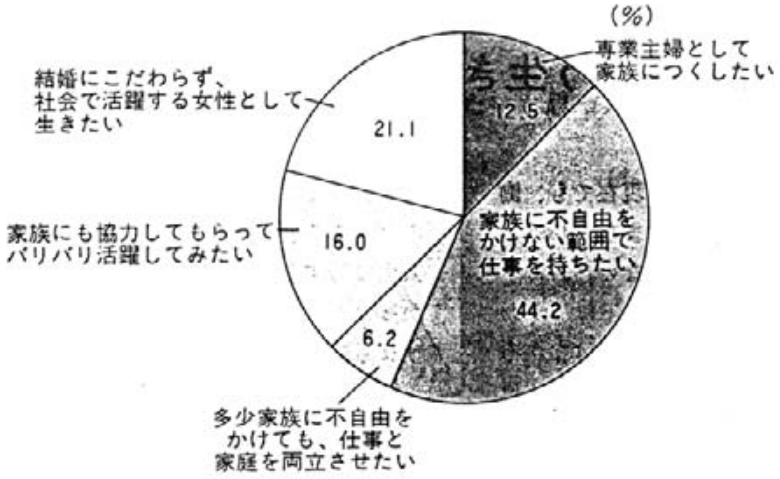


図40　母親が仕事をもつと子どもは

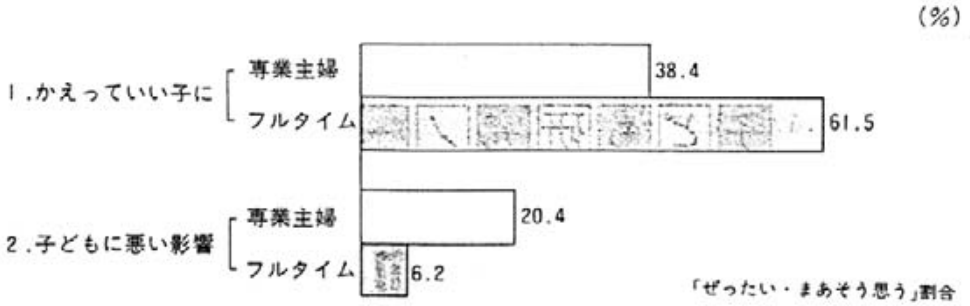


図41　仕事と子育て

——働く姿を見せておけばいい子に——

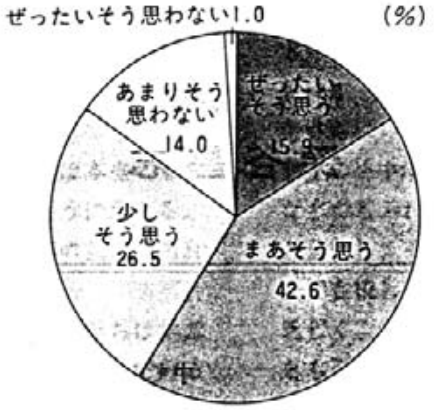
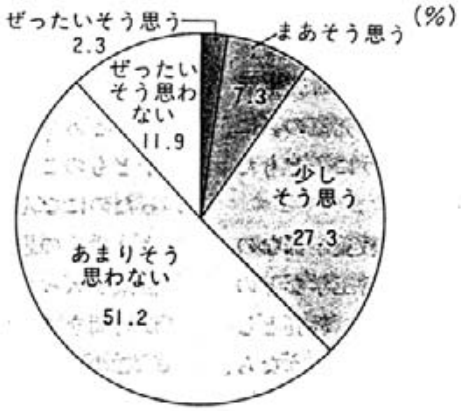


図42　仕事と子育て

——母親が仕事をもつと子どもに悪い影響——



※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。